まず、今回の短期在外研究の場所として台湾の台北を選んだことについてその理由を記しておきたい。報告者は大学入学時からフランス語圏の哲学に関心を抱き、フランス語で書かれた文書を読むためにフランス語の運用能力向上に努めてきた。もちろん、哲学研究のためにはフランス語だけでは不十分で、その他の西洋の諸言語も学ばなければならなかったが、その反面、中国語も韓国語〔朝鮮語、ハングル〕もまったく知ることなくこの年齢に至ってしまった。同僚の志野好伸教授に同行して、上海、台北などでシンポジウムに参加しても、英語で会話し、英語で発表するだけであった。しかしその一方で、明治大学文学部に哲学専攻が新設されたのとほぼ同時期に、報告者は志野教授と共に、国際東アジア学会(International Society of East-Asian Philosophy.以下 ISEAP と略記)の創設メンバーとなり、加えて Springer 出版から「東アジア哲学ジャーナル」(Journal of East-Asian Philosophy. 以下 JEAP と略記)を創刊することとなった。ISEAP も JEAP も英語を共通言語としているとはいえ、このような活動を責任をもって行う者がアジアの言語を全く知らないということはありえないと痛感するに至った。かくして報告者は、すでに高齢ではあるが、中国語の修得を決意したわけだが、これまた志野教授の仲介で、報告者は数年前に林鎮国・国立台湾政治大学名誉教授の知遇を得、その学識とお人柄に深い尊敬の念を抱いていた。林教授は名誉教授となられてからも政治大学で教鞭を執るのみならず、台湾における仏教哲学研究の指導者として、多くの研究者に慕われる存在である。この機会に是非林教授のそばで研究を進めたいと思い、国立台湾政治大学の哲学科に受け入れを依頼した次第である。受け入れに際しては、同哲学科の主任・王華副教授ならびに馬副教授に大変お世話になった。ここに記して深謝申し上げたい。

研究活動について次に報告するが、まず、シンポジウムでの発表は以下の通りである。1）１１月１３日、すでにその名を挙げた馬副教授が主催するスピノザ・シンポジウムに参加、Spinoza, Daisetsu Suzuki and Hua Yan Sutra という発表を行った。２）王副教授と獨協大学の林准教授が主催した日本哲学をめぐるシンポジウムに参加、"Rethinking the Philosophy of World History"という発表を行った。３）台北のヨーロピアン・クラブ主催のセミナーで、１２月７日、今回の研究課題であるエマニュエル・レヴィナスの哲学に就いて発表を行った。この発表では、中国におけるレヴィナスの著作の紹介、その研究の動向についても報告することができた。3）３月９日から１５日まで、パリ第十大学の招待で同大学を訪れ、３月１４日に Traduire Autrement qu'etre. Vers la grammatologie francaise と題された発表を行った。これもレヴィナスの哲学を扱ったもので、eon という古代ギリシャ語をレヴィナスとハイデガーがどのように捉えたかを論じたのだが、この問題は哲学と翻訳というより大きなテーマにつながるものであると同時に、日本語と中国語における「繫辞」（コプラ）の存在といういまだ解決を見ていない問いとも係っている。今回、後述するように、初心者として中国語を学んだことがこの問題意識に反映されていると言ってよい。セミナーに参加してくれた大学院生のなかには、まさに台湾、中国、日本からの留学生が複数深まれており、セミナー終了後もこの問いをめぐって大いに議論が交わされたのは嬉しい出

来事であった。

レヴィナスは昨今中国語圏で広く読まれており、台湾のアカデミア・シニカに所属する黄教授のように極めて優れたレヴィナス論を発表している研究者も少なくない。彼らの多くは老荘思想、儒教との連関でレヴィナスを捉え、例えば惻隠の情と呼ばれるものとレヴィナス倫理学を対比している。今回、黄教授との対話、ならびに政治大学図書館での調査を通じて、この連関および両者の差異について考える機会を得た。これは今回の在外研究の大きな成果であり、近々論文にしたいと考えている。報告者は訪台に先立って、４月には明治大学哲学専攻主催のライナー・シュールマンをめぐるシンポジウムでレヴィナスとシュールマンについて発表し、また、８月３０日にはレヴィナス協会主催のシンポジウムで、やはりレヴィナスの Autrement qu'etre について発表した。これらの発表は上記パリ第十大学での報告と密接に係るもので、今回の滞在中にこれら二つの発表を論文としてまとめることができた。いずれも２０２５年度中には明治大学哲学専攻紀要 Minerva、レヴィナス協会紀要に発表される予定である。パリでの留学生との出会いについて先に語ったが、台北でのシンポジウムでも、政治大学の学部生、大学院生のみならず、国立台湾大学の大学院生、日本から韓国の大学に留学し更に台北でも学んでいる留学生と出会うことができたのは実に大きな収穫であった。困難な状況のなかで学問を続ける彼らの熱意と誠実さに報告者は深い感動を覚えないわけにはいかなかった。

すでに記したように、今回の在外研究の主眼は中国語の修得であった。国立台湾政治大学にはエクステンションとして留学生たちに中国語を教えるシステムが完備されており、報告者は２０２４年１０月１日から２０２５年２月２１日まで、その初級クラスに所属して、一日三時間の中国語の授業を経験した。教師はベテランの張教師、クラスメイトは息子、娘と言ってもよい６人の若者たちだった。わずか７名の小さなクラスであったが、国籍はというと、アメリカ合衆国、タイ、マレーシア、アルゼンチン、チェコ、日本の六つと多様で、それぞれが異なる「エクソフォニー」（多和田葉子が「母語を奪われた状態」にあてた言葉）の状態に置かれたわけだが、「ワ」がどうしても「ヴァ」となる者、報告者のように四つの声調が聞き分けられない者、逆に他の者よりスムースに声調の区別ができる者、関係代名詞を持つ言語に慣れているがゆえに中国語の語順に当惑する者等々、毎日が「言語とは何か」を深く考えさせる体験の連続であった。台湾は繁体字を今も用いており、報告者は比較的簡単に漢字を書くことができるが、他の者たちにとってはこれは極めて大きな試練である。漢字を学ぶ苦労ゆえに日本人の知性は発達せず、また、その考えは他国人に理解されないと考え、漢字廃止論を唱える者がかつていたこと、今もいることはご存じの通りであるが、中国語を学ぶことは、中国語と日本語との関係を考え直すことでもあった。先に挙げた「繋辞」の問題なども、このような経験から生まれたものである。

報告者は長年フランス語の教師を務めてきた。今も哲学専攻の学生には語学を大切にしてほしいと切に願っている。今回、毎日教師から叱られ、皆に笑われ、最高齢の参加者として留学生パフォーマンス・コンテストに出場したことは、他では決して得られない貴重な経

験であった。それを可能にしてくれた張先生には心から感謝申し上げたい。３月末までの滞在であるため、残念ながら中級クラスには登録することができなかったけれども、すでに、中国語と中国での哲学研究を視野に入れた共同研究の企画などを構想しており、その意味でも、中国語学習の３か月はこのうえもなく重要なものであったと言えるだろう。哲学専攻での今後の教育にもこの経験をぜひ活かしていきたい。

滞在中に構想された今後の研究計画について更に述べておくと、中国語圏でのレヴィナス受容について調査するなかで、一方では、１）中国、台湾、韓国、北朝鮮、ヴェトナムという「漢字文化圏」のなかで哲学を考え直すこと、２）かつての大日本帝国とその「大東亜共栄圏」とは何だったのか、その哲学的意味を究明すること、他方では、３）レヴィナスの哲学を中国語圏のみならず、様々な世界の場所において捉えること、などが報告者の課題として浮き上がってきた。２）については上記、"Rethinking the Philosophy of World History" がその端緒となる考察を展開しており、また１）についても上記 Traduire Autrement qu'etre がそのいわば序奏となっているが、今後、それを更に拡充していきたい。３）についてだが、中国語のクラスメイトであったアルゼンチンの青年との対話のなかで、アルゼンチンのユダヤ人コミュニティーの重要性を改めて知ったことも手伝って、「解放の神学」など南アメリカの思想との連関でレヴィナスを考えること、更には、イランなどイスラーム圏でのレヴィナス受容にも目を向けることが必要であると考えるようになった。「世界に撒種されるレヴィナス」とでも言う視点の必要性を今回痛感した次第である。早速、この視点からの研究計画を具体的にたてることにしたい。

総じて、この６か月、中国語の学習、図書館などでの文献調査、様々なシンポジウムでの発表という３つの軸が絡み合い、幸いなことに互いを妨げることなく報告者の知的関心を刺激してくれたと言ってよいが、最後に、報告者の積年の研究テーマである「海と島々からの哲学史」との連関に触れておきたい。２０２３年、報告者は日本最西端の与那国島を訪れた。申し添えておくと、報告者は瀬戸内沿岸の港町の生まれで、眼前に塩飽の島々を見て育った。加えて、２８歳からの３年間、沖縄の琉球大学で教鞭を執った。世界は今も生成しつつある多島海（アーキペラゴ）である、というのが報告者の根本的な主張である。その意味で、与那国島から時に肉眼で見ることのできる台湾島での滞在は、報告者の実存感覚に大きさ作用を及ぼさずにはおかなかった。台南高雄の海岸から広がる海。大陸と至近距離にある金門島。そこから更にマレーシア、インドネシア、フィリピンと幾つものアーキペラゴが連なっている。もちろん、国境という不可視の線がそこに刻まれてはいる。しかし、それには還元されることのない未曽有の関係性をこれらの島々は示しているのではないだろうか。報告者のうちでは、香港の島々、沖縄の島々、韓国は仁川の島々等々が繋がり合っており、そこに台湾も位置づけられる。これは報告者が Archipelagic thinking of East-Asia と呼ぶものに他ならず、学問を刺激し続ける多島海的実存感覚を今回の滞在は練成してくれたと言ってよい。それを可能にしてくれたすべての方々に心より感謝申し上げたい。